

批評の考古学

——フーコー／ハッキングにまつわる諸論考を手がかりとして——

木村 政 樹

一 はじめに

本稿では、近年における「知」の歴史的研究についての理論的考察を参照しつつ、近代日本の批評史研究の方法論の練り上げを試みる^①。特に注目したいのが、ミシェル・フーコーおよびアン・ハッキングに関連して展開された科学的な研究である。このような理論潮流と接続することを通じて、来たるべき「批評の考古学」の見取り図を提示してみたい。管見の限り、そうした研究プログラムはいまだ確立しておらず、本稿が議論の呼び水になればと思っている。

「知」の歴史的研究という問題領域に関しては、従来の日本近代文学研究ではカルチュラル・スタディーズの成果が注目されてきた。その流れは、文学研究において社会学に関心が向けられたこととも並行していた。だが、現在から振り返ってみれば、日本近代文学研究における社会学の影響は、カルチュラル・スタディーズに偏重していたように思える。それとは異なる研究潮流

が、正面から受け止められてきたとは言い難いのではないか。

このことと関連するのが、ミシェル・フーコーの受容のされ方である。日本近代文学研究においても、フーコー由来の「言説分析」という方法は強く意識されてきた。だが、そのフーコー受容の多くは、カルチュラル・スタディーズの潮流を念頭に置いたものだったのではないだろうか。それとは別のフーコー受容のあり方、たとえばハッキングへと継承される科学的なフーコー受容については、注目されてこなかったと思える。

フーコー的な言説分析は、知識社会学やカルチュラル・スタディーズとは別ものである、というタイプの見方は、これまでにもくり返し提示されている^②。本稿が描くフーコー像も、ことさらに目新しいものではない。ただそれが、日本近代文学研究におけるフーコーの標準的なイメージと大きく異なっているだけである。そこで以下では、フーコーの「考古学」という枠組みを軸として、近年の科学史や社会学の領域における議論を参照しつつ批評史研究への接続を試みたい。

二 「批評の考古学」

フーコーの『知の考古学』は「知」の歴史的研究における古典的な著作であり、「言表」「言説」「アルシージュ」などの難解な術語を用いてなされたその主張は多くの読者を魅了してきた。フーコーによって提起された諸問題は本研究のプログラムにおいても重要な位置を占めている。そこでまず、本節では『知の考古学』におけるフーコーの議論を概観しながら、同時に日本の批評史研究への応用可能性についての考察を織り込んでいきたい。

フーコーは自らの考えを、人間主義および人間学的思考とは異なる歴史的分析として提示している。その際、従来の「思想史」とは異なるものとして「考古学」を位置づけている。フーコーは「連続的な歴史」「文化的全体性」「主体の至上権」などを批判し、「非連続性」や「種別性」に関わる一連の語群を用いて「言説」「アルシージュ」などについて論じた。

フーコーがさしあたり考察の対象として見込んでいるのは、たとえば医学・政治経済学・生物学などの諸科学である。この点については、あえて強調しておきたい。たしかにフーコーは、「言説」をこれらの諸科学に限定していない。そのことに力点を置くならば、「言説分析」の研究対象は科学以外のものであつてかわまない、という結論に至るだろう。だが、フーコーはひとまず、これらの諸科学の統一性に着目した。その上で、その統一性を問いに付し、これまでよく知られている科学の姿、すなわち従来の

科学観や科学像を、批判的に再考しようとした。それは、科学というものをひとつの謎として捉え直し、科学がどのように実践されているのか改めて記述しようとする方法だといえよう。

本研究では、このような科学的な観点から近代日本の批評に焦点を当てることを目指している。近年の日本近代文学研究では、同時代評分析や作家作品のイメージ分析、文学評価の変遷の分析などがなされてきた。それらの考察の多くは、カルチュラル・スタディーズにおける「表象」の研究に陰に陽に影響を受けたものである。もし仮にそうした観点から科学についてアプローチした場合、おおむね科学「表象」の研究となるだろう。科学「表象」は、科学そのものではなく、科学についてのイメージだといえる。だが、フーコーは人間諸科学そのものを主な研究対象としていたし、その背景にはジョルジュ・カンギレムなどのフランス・エピステモロジーの知的潮流が存在していた。

では、近代日本の批評は「科学」なのだろうか。この点についてはすでに拙稿で触れたこともあるが、ここでは以上の文脈に即して整理しておこう。たとえば、批評の一つの典型として、文芸時評がある。文芸時評は、主に雑誌に掲載された文学作品を月ごとに論評するジャンルだと捉えられている。このような文章が、制度的に確立した科学とみなされてきたものではないことは明らかであろう。

批評には、通常思い描かれるような科学としての統一性は想定されてこなかった。したがって、批評史研究は、特定分野についての科学史の研究とは様相を異にする。しかし、だからこそそれ

は、考古学の対象として重要だと考えられる。というのも、先にも触れたように、考古学の対象は特定の科学に限定されないからである。だが、フーコーの考察が科学の統一性に着目するところから始まっていたことも忘れてはならない。

つまり、筆者が言いたいのは、人文社会科学の考古学という視座を軸として、そのうえで「批評」を捉えていくべきではないか、ということである。そうすると、たとえば、〈科学に関する専門的な知識が、どのようにエッセイや雑文に織り込まれているのか〉といった形で、批評というジャンルについて問題を整理し直すことができると考えられる。こうしてみれば、批評が科学と無縁だとはいえないこともわかってくる。

まず、批評は、真理を探究することを共通の目的とした共同作業というわけではないものの、ある種の科学的な発想や認識を取り入れて運用するタイプのジャンルではある。とりわけ、マルクス主義などの社会科学の知識は、昭和期の批評において重要なものだった。また、文芸批評には文学研究の論文と極めて似通った内容のものも存在する。大学の「国文学科」「日本文学科」の存在や、「日本近代文学会」「日本文学協会」などの学会の存在を考えれば、日本文学研究が現在学問として認知されていることは間違いない。制度的に確立した現在の文学研究を、考古学の対象として想定しうる諸科学の一変奏とみなすことにはさほど異論はないだろう。こうしてみれば、批評とは科学であるようなそうでないような、極めて曖昧な存在でもある。だが、くり返すならば、だからこそ考古学の対象にふさわしいといえる。

以上のような観点から「批評の考古学」を行なうとして、では、考古学とはどのような方法なのだろうか。それは一般に、言説の条件、形態、規則などについて考察する営みだと認識されている。ただし、それは通常考えられているような科学の規則性を論じることとは異なり、「語られたこと」に注目する。そこで、「言表」「言説」「アルシーヴ」といった一連の概念が練り上げられた。たとえば、フーコーによれば、「言表」の分散のシステムを記述できたとき、それは「言説形成」を論じたといつてよいことになる。

『知の考古学』で使用されている一連の用語については様々な議論があるが、ここでは松村一志『エビデンスの社会学』（青土社、二〇二一年）による説を参照したい。松村は、フーコーの言説分析を「アルシーヴ」↓「言表のシステム」↓「言説」↓「言表」という四つの単位からなるモデルとして整理している。今はその具体的な内容については置いておこう。問題は、なぜフーコーはこのような特殊な概念を駆使したのか、ということである。松村はそれを、社会学の立場から読み解こうとする。実際に、『知の考古学』で批判対象となっているのは「思想史」なのだが、フーコーの言説分析は社会学に対する挑戦とみなすことも可能だというのが、松村の見立てである。

松村は、「言説分析の社会学」とつての魅力は、通常想定される「社会」のイメージを裏切ることにある「のだと述べている。どういふことだろうか。たとえば、マルクス主義のイデオロギー論は、「外部条件↓主体↓認識」のモデル、すなわち「外部

条件が主体を規定し、それによって認識が条件づけられる」という発想を採っており、古典的知識社会学もまたその点においては同様である。他方で、フーコーの言説分析では、「言説」が「ミクロにもマクロにも多重化」される。それによってフーコーは、「外部条件→主体↓認識」というモデルとは異なるタイプの「社会構造（めいたもの）」を見出そうとした^⑧のだという。では、その新しいモデルについてどのように理解すればよいのか。松村は次のように述べる。

もしも「言表」や「言説」あるいは「アルシヴ」といった単位を明確に定義してしまえば、それ自身が「社会学的想像力」のレパートリーの一つになる「 $\therefore$ 」。そうなると、既存の「社会学的想像力」を問い直す力は失われてしまう。フーコーが「言表」なる耳慣れない単位をあえて導入し、そこにはほとんど明確な定義を与えなかったのは、通常の議論に対する違和感の喪失を防ぐためだろう^⑨。

このようにして松村はフーコーのモデルを、通常の社会学のモデルとは別の新たな関係を提示するためのものとして捉えている。なお、右の引用文の最後には注がついているが（煩雑なためここでは省略した）、その注の文章には、「ラトゥールの言う「アクター（ネットワーク）」も、積極的な定義を拒む点で、フーコーの「言表」によく似ている^⑩」と書かれている。

松村のこのようなフーコー論からすれば、フーコーとラトゥー

ルにはある種の共通性が見出せることになるだろう^⑪。そこで、いささか話題はずれるが、ここでの論点をより明確にするために、ラトゥールらが提唱してきたアクターネットワーク理論（ANT）についての近年の研究を参照しておきたい。金信行は、ブリュノ・ラトゥール＋ステイヴ・ウールガー『ラボラトリー・ライフ』の解説論文において、次のように述べている。

「 $\therefore$ 」 ANTは、社会現象の要因や要因間の関係に関するアプリオリな先入見を保留することで、隠れた要因や要因間の影響関係を索出して経験的記述に含めることができる。この点を踏まえると、ANTを「社会現象が成立する過程でいかなる要因がどのように関係を構築しているのかを新たに発見して記述に含めるための理論」として言い直すことができる。つまりANTは、因果的要因を特定して社会現象を説明する理論ではなく、分析者の先入見で軽視されてきた要因や要因間の関係を新たに発見するための理論なのである^⑫。

金はこのような立場から、「アクター」と「ネットワーク」というANTの概念は、各々の社会現象でさまざまな様相を持つ要因やその関係をアプリオリに限定することなく記述へ含めるために意図的に意味内容を乏しくした、空の箱なのである^⑬」とも評している。これは、先に松村が「アクター（ネットワーク）」について述べていたこととも呼応する指摘であろう。また、諸科学が「成立する過程でいかなる要因がどのように関係を構築している

のか」を論じるという点に關していえば、ANTだけでなく考古学にも当てはまる特長だと考えることもできる。

フーコーやラトウールらが提示したこのような方向性にこそ、「批評の考古学」の要諦は存在しているのではないだろうか。これが、前節で述べたところの、カルチュラル・スタディーズとは異なる科学的なフーコーの姿である。そして、先述したように、ハッキングはこうしたフーコーの系譜に存在する哲学者だと考えられる。松村は『エビデンスの社会学』のなかでハッキングの研究を参照しながら考察しており、そうした意味では本節での議論もハッキングと無縁ではないのだが、次節ではより明確にハッキングと関連している議論も参照していきたい。

三 「文学研究の考古学」と「批評の考古学」

イアン・ハッキングは、フーコーが問うた「知の考古学」の課題を継承し、「歴史的存在論」を提唱した科学哲学者である。石井幸夫によれば、ハッキングが着目したのは「人間科学が対象とする言葉ともの、観念と対象、概念と（それが名指す）活動には「…」不動の定点」が存在していないということであった。ハッキングは自身のことを、「『名づけ』というわれわれの営みが、われわれが名づける対象といかなる相互作用を及ぼし合うのか」という問題に興味を抱く、「動的唯名論者（dynamic nominalist）」であると述べている。哲学的でありつつ経験的研究としても破格のスケールを有するハッキングの議論は、科学史や社会学の分野において、今もって注目されている。¹⁷

たとえばそれは、「概念分析の社会学」というエスノメソドロジー（EM）に受け継がれた。「概念分析の社会学」では、ハッキングの「ループ効果」の議論を参照しつつ、「新しい概念が私たちの経験や行為の理解の仕方をもどのように変えていくのか、そうした私たちの変化がどのように概念の位置づけ自体を変えていくのか」について考察されている。それは「人びとの方法論」¹⁸を使ったEM研究であるが、そのスタンスは前節でみたフーコーやラトウールと親和的であるようにも思える。

この点について、『人文学報』第二二二号で組まれた小特集が参考になる。この特集は、二〇二二年に開催された「実践としての科学的認識——『客観性』『ラボラトリー・ライフ』を読む」をきっかけとしており、科学論に関連する歴史学および社会学をめぐる問いの現在の課題をうかがい知ることができるものだ。なお、この合評会企画の背景には、『客観性』と『ラボラトリー・ライフ』が同時期に翻訳刊行されたという研究状況があった。¹⁹特集に収録されている論考は、岡澤康浩「可能性の空間の地図制作——概念の歴史学と実践の社会学の対話」、前田泰樹「実践における概念を研究するとはどのようなことか?——エスノメソドロジーから見た『客観性』と『ラボラトリー・ライフ』」、河村賢「普段着姿の認識論と存在論に立ち戻る」である。

岡澤はここで、前田・河村のいずれの論考も「概念の歴史と実践の分析を結びつけようとする」ものであることを指摘したうえで、両者がイアン・ハッキングの歴史的存在論に言及していることに注意を促している。岡澤によれば、前田・河村の論考は「概

念の歴史と実践の分析が、可能性の空間を描くという「ハッキングの」課題を共有しているという見通し」を提示するものである。²¹⁾

この岡澤の指摘に付け加えるならば、前田と河村の論考は両方とも、EMの立場を擁護するものである。前田によれば、EMの試みは『客観性』の議論およびANTとも連携可能なものである。また、河村によれば、「ハッキングの歴史的存在論やゴフマンの生態学的分析は、すでに別の名前と呼ばれたエスノメソドロジー²²⁾」として位置づけられる。

このように、ハッキングおよびEMの視座から展望されるのが、「概念の歴史と実践の分析」の同時遂行である。河村はこれについて、「歴史についての問いとインタラクシオンについての問いは決して切り離すことができない」と述べ、「人々がそれに基づいて様々な実践を組み立てているところの」「普段着姿の認識論と存在論」を研究すべきだと提唱している。²³⁾

以上の学際的な研究に対して、文学研究の側からどのような応答が可能だろうか。私が本節で考えたいのは、このことである。

まず、右のような研究史の整理において、フーコーは「概念の歴史」の側に位置づけられる。そうだとすれば、前節で見てきた「批評の考古学」もまた、ひとまずは「概念の歴史」に類する試みだと想定しておくことができる。それに対して、フーコー的な「概念の歴史」にもまた「実践の分析」としての特質が必要ではないか、というところが、先の特集の論点であろう。

「実践の分析」の試みを模索するにあたって、ここでは松沢裕

作『歴史学はこう考える』を参照しておきたい。松沢はEMの知見をふまえ、「歴史家が史料を引用しながら言葉をあやつるとき、そこで何がおこなわれているのか」²⁴⁾について、いくつかの日本の歴史学の論文を研究対象として取り上げて分析している。これは歴史学の「実践の分析」としてありうるひとつの方向であり、松沢が示したこの方向性を徹底することによって、日本の歴史学における「普段着姿の認識論と存在論」の一端も見えてくるのではないか。その認識論および存在論は、「実証」や「史実」といった概念に関わるだろう。

なぜここで、日本の歴史学という問題に言及するのか。それは、日本の文芸批評および文学研究が歴史学に隣接したジャンルだからである。とりわけ、文学研究において資料調査をベースにしたいいわゆる「実証研究」は、歴史学に類似している営みであるといえる。もちろん、文学研究者の行なっている論証の作業は、歴史学の専門家から見れば、歴史研究としては認められないと判断されることもあるだろう。にもかかわらず、いやそれゆえに、歴史学のEMという課題は文学研究にとっても重要である。もちろん、歴史学における論文の方法と文学研究の論文のそれが同一のものと言いたいわけではないし、特定の分野では単一の方法が確立していると言いたいわけでもない。分析にあたっては、あくまで個別の「人びとの方法論」に注目する必要があると考えられる。

ここで、歴史学は「科学」なのかという問題も出てくるだろう。ここではひとまず考古学の対象としての「科学」として捉え

るが、自然科学を典型とした「科学」概念においては、科学ならざるものとして語られることもあることは注意しておきたい。松村は『エビデンスの社会学』で、一九世紀において「証拠の専門分化」が起り、「精密測定」の理念を持つ実験科学の台頭とともに、法的言語のもとで緩やかにまとまっていた「証拠」の概念が共有されにくくなり、「法的証拠・歴史的証拠」と「科学的証拠」が切り離され⁽²⁵⁾たと論じている。こうした研究をふまえてみれば、歴史学は「科学」なのかどうかという問題は「証拠」という概念にも関わる問題だが、いずれにしてもそれを直截的に問題にしたいのではない。さしあたり歴史学を「科学」（ないしは「人文科学」）と便宜的にみなしておくことと、諸学問分野において歴史学が「科学」かどうか議論されたことそのものを考察することは両立する。

そのうえで、歴史学と比較して、「日本近代文学研究」とはどのような学問か、ということについて考えたい。日本近代文学研究の歴史については近年考察が進んでいるが、なかでもプロレタリア文化運動関係者や民間史家らの活動との関係で論じた中山弘明による研究が注目される⁽²⁶⁾。在野民間史学とアカデミズム史学の関係についてはこれまでも論じられてきたが、今後はそうした史学史的な潮流のなかで日本近代文学研究についても考える必要があるだろう。では、歴史学との関係に重点を置いたとき、「批評の考古学」はどのようなものになるだろうか。現在のところ、少なくとも以下の三つの方向性を示すことができるように思われる。

ひとつ目は、歴史学や文学研究のEMで想定される「事実」「論証」に関する概念を、批評を対象としたEMでも考えていく、という方向性である。文学研究の場合、作家の伝記的事実や具体的な出来事をめぐる議論では、過去に起こった（いわゆる）歴史的な事実が問題となるが、文学作品の収集・保管や本文校訂などにおいては、また別の書誌的な事実が中心となる問題となるだろう。いずれにせよ、これらの研究的な営みは、ある種の文芸批評にも見てとることができる。たとえば『近代文学』同人の平野謙や本多秋五の批評は先行研究として把握されることがあるが、それは両者の考察が「実証」的だとみなしうる特質を含んでいることにも起因しているだろう。

文学研究と批評の差異についてはこれまで多くのことが語られてきた。だが、個々の研究ないし批評が具体的に何をしているのかを記述する、研究／批評のEMについては今後の課題だと思われる。文学研究がいかんとして学問として成立したか、といった問題もまた、実際にどのように論文が書かれているのかと併せて考える必要があるだろう。この観点からみれば、歴史を書く方法自身につけ実践することは、ある種の自己形成の営みとして捉えることもできる。これをさしあたり、歴史家的自己の形成といつてもよい⁽²⁸⁾。

二つ目は、批評なるものが革命家的な自己を形成する営みだったのではないか、という方向性である。革命と自己の関係については、既に拙稿で論じてきたことなのでくり返さないが、自己の形成という実践に関しては、本稿で見てきた「批評の考古学」の

プログラムのなかで改めて位置づけることができる。また、革命的自己の形成という問題は批評というジャンルに限定されるものではなく、その他の人文社会科学分野における営みにおいても同様に考察されるべきものである。

三つ目は、批評を書くことを通して、批評家的な自己を形成することを試みたのではないか、という方向性である。先述したように、これまで実証研究に類似した批評が書かれたこともたしかである。他方で、「批評家」という主体が構築されるにあたっては、研究者との差異化が図られることもあった。そうしたなかで、批評であるならば実証性や論理性が「学問」ほどに要求されないという価値観もまた生み出されたと考えられる。

論理的な飛躍のある文章が批評らしい文体として認知される過程には、歴史学的な自己の形成とは異なるヴェクトルが宿つていたと考えられる。一例を挙げれば、文芸評論家の福田和也は、柄谷行人のある批評文について、それが事実としては間違っているにもかかわらず、批評として評価できるという趣旨のことを述べている³⁰。福田の柄谷論は、批評は生きられるものである、といったタイプの批評論であることはたしかだ³¹。だが、柄谷の論の事実の提示の仕方をめぐる指摘そのものは、批評文を精読していくうえでも興味深い着眼点だといえよう。批評家の自己の考察は、柄谷のような批評家による批評がどのように書かれているのかについての分析としてもなされるべきである³²。

以上、三点にわたって論じてきたが、「批評の考古学」における「実践的分析」はこれらの方向性に尽きるものではないことは

留意したい。たとえば、作家の文学論や批評の読者に関連するテーマなどが考えられるだろう。また、A N Tを「分析者の先人見で軽視されてきた要因や要因間の関係を新たに発見するための理論³³」として捉えるならば、これまで見過ごされてきたモノを考察の対象に含めることも十分に考えられる。批評史研究では依然として積み残された課題が多い。ここで行なったのは、ひとまず方法的な立場からの見通しを示すことに留まる。ともあれ、「批評の考古学」においても「概念の歴史」と「実践的分析」は両立させるべきものだといえよう。

四 「批評とはなにか」再考

フーコーが『知の考古学』で「言表」「言説」「アルシージュ」などの概念を提出したとき、その前提には自らのこれまでの研究蓄積があった。ラトウールの「アクター」にしても事情は同様であり、自他の経験的研究の成果をもとに理論構築されていると考えられる。主たる研究対象が異なれば、当然理論も変わってくる。おそらく重要なのは、他分野の研究との関係を意識しながら、研究の方法論を練り上げることだ。以下では「批評とはなにか」という問いについて再考することで、本研究の立場について確認しておきたい。

本稿は「批評とはなにか」という問いに導かれた一連の方法論的考察のひとつである。以前にも述べたように、「批評とはなにか」という問いは「言論空間全体を俯瞰するための理論的土台³⁴」の構築には寄与しないだろう。結局のところ、批評とは学問・文

化・芸術などに関するカテゴリーのうちのひとつとして考えておくのが妥当だが、だとすれば、「批評とはなにか」という問いは、文学研究・歴史学・社会学・哲学などの既存の学問の営みの中核的な問いでさえない。強いて言えば、「批評史」という領域においては中核的な問いとみなすことも可能だが、現状においては「批評史」というジャンルが学問的に確立しているとは言い難い。もちろん、批評史によって、「社会全体」や「時代精神」のようなものを論じることができない。

では、「批評とはなにか」という問いは、どのように位置づけられるだろうか。ここまでの考察をふまえて考えれば、次のように言うことができる。

「批評の考古学」では、批評という言葉を書述することを試みる。それは先述したように、どのように（How）構築しているのかを問うものだ整理できるが、この構築のありようこそが、「批評とはなにか」（What）への答えになる。それを記述することは、これまでの批評というジャンルに関するイメージを刷新する新たな関係性を発見する行為である。

このように、「批評の考古学」の立場から、「批評とはなにか」という問いの役割を再設定することが可能になった。さて、このようにみた場合、フーコーが複数の科学を研究対象として論じたように、「批評」においてもその隣接諸領域を含めて「考古学」を進めていくべきことがわかるだろう。

前節で述べたように、批評の考古学においては、歴史家的自己、革命家的自己、批評家的自己の形成が扱われる。このうち歴

史的な自己と革命家的自己は、歴史学・文学研究・日本共産党などの学問・政治に関わる領域において、とりわけ文芸批評に関係なく求められるものだったといえよう。また、それぞれの領域の範囲も流動的であり、一定の確固たる単位を構成していたとは言い難い。そして、一人の人物がこれらの多様な領域に関わり、多様な立場を採ることは特に妨げられていなかった。

にもかかわらず、従来の研究においては、歴史学の歴史、文学研究の歴史、日本共産党の歴史はそれぞれ別のジャンルとして把握されてきたといえるだろう。学問や組織の単位に切り分けられ遡及的に再構成されてしまった歴史叙述においては、混在しながら形成されていた知の連関は捨象されてしまう。こうしてみれば、批評について考察することは、専門分化した学問の枠組み自体の問い直しにつながるものでもある。

他方、これらの学問や組織は、批評の中心的な居場所であると捉えられてこなかったこともたしかである。歴史学では歴史学者が、文学研究では文学研究者が、日本共産党では党員の活動家が主な人物類型として想定される。では、批評家はどこを住処としているのか。これは従来、アカデミズム／ジャーナリズム、ないしは政治／文学といった二項対立のうちの後者に属するとみなされてきた。「研究」が大学制度を前提とするのに対し、「批評」は商業媒体で発表される。あるいは、活動家が政治組織に属し革命運動に従事するのに対し、文学者は政治組織の硬直性や教条性を批判しつつヒューマニズムを希求する。このような見取り図のなかにおいて、批評は学問や政治の制度・組織とは距離を取りつ

つ、市場における自由な言論の場に属するもののように観念されるだろう。ただし、当然のことではあるのだが、研究者もジャーナリズムを舞台として活動することがあるし、日本共産党員にも批評を書く人物は存在する。このような区別が確固たるものではないことは明らかである。そして、批評家であることを保証してくれる制度的な支えがあるわけでもない。

ここまで定義が曖昧な対象に対して、「～とはなにか」という問いを発すること自体が学術的な厳密性を欠いているのではないかと、という反論も想定されるだろう。仮にそれが分析概念だとしても、文化の広がり の総体を決定できないからだ。だが、このような定義の曖昧さは、考古学の方法からみれば問題にはならない。松村がいうように、『知の考古学』には「資料群の全体」（Ⅱジャンル）や「一つの資料」といった同一性の想定を解除しようとする「狙いが込められており、同書でフーコーが主張しているのは、「科学」や「文学」あるいは「作品」や「書物」のよう なわかりやすい単位を度外視して、目の前の資料に向き合うべきだということ」だからである。

ただし、何も前提がないところからいきなり言表について記述することはできない。学問領域などの単位は、分析を開始するために不可欠な入り口としての役割があると考えられるが、ここでは次のことを強調しておきたい。すなわち、論者が分析に先立って想定している学問領域などのカテゴリーは、その考古学的な実践が問題化しうる議論の射程に事後的に関わってくる、ということである。この意味で、ひとまず「批評」というジャンルを想定

しておくことは、のちに多方向的な議論を展開するための準備として有益な問題設定だと考えている。

本研究のプログラムは日本近代文学研究という分野から生まれたものであり、その対象／方法とともにその土壌に大きく規定されているだろう。考古学という実践を追究するためには、先述したように他分野の成果からも学ぶことが不可欠であると思われる。ここまで主に科学史および社会学の成果を参照してきたが、本節を締めくくるにあたっても同じようにしたい。

科学史／メディア論を専門とする岡澤康浩は、「接続と切断の科学史」という魅力的なアイデアを提出している。その内容は、日本の批評にも関連するものだ。岡澤によれば、「知的共同性にせよ、それを支える社交性にせよ、その種類はもろろん一つではありえない。だから、ある特定のタイプの接続を志向することは、同時に異なるタイプの接続が作り出すネットワークから意図的に切断することでもありえる」。このような「接続」と「切断」について考えるうえで岡澤は、ロレイン・ダストンのセミナーや京大人文研にまつわる自身の研究者としての体験について語っている。興味深いのはその議論が、浅田彰による「新しい知の回路を作るといふメディアの実験」にも及んでいることだ。

浅田は京大出身であり人文研には助手として勤めていたが、一般にはニューアカデミズムのスターとして知られる。浅田が関わった『GS たのしい知識』や『批評空間』はジャーナリスティックな批評の場であり、とりわけ後者には「批評」の定義に関わる議論を展開した批評家たちが集まった。岡澤は、一般に

「批評」の場だと考えられているこれらのメディアを含めて、「科学史」という観点から捉えようとしている。ここで想定されている「接続と切斷の科学史」のありようは、従来の「科学」像を問う直すものとなるだろう。

このような問題提起に対して、日本近代文学を専門とする批評史研究者がどのように応えていくのか。それは今後の課題だと思われるが、まずはそうした議論を進めていくためにも、批評というジャンルを「科学」という枠組みから捉えておきたい。日本近代文学研究／批評では、これまで研究／批評の弁別をめぐる議論がくり返されてきた。纏れた糸のように混乱してしまったその種の議論の圏域から抜け出すためには、研究／批評の二項対立そのものを問い直す新しい研究の枠組みこそが要請されている。

五 おわりに

従来の日本近代文学研究における「言説」の研究において主に意識されてきたのは、カルチュラル・スタディーズにまつわる理論や方法であったといえよう。一九九〇年代以降、「表象」「ディスクール」といった語を用いて既存の文学史を批判的に再考する試みが多くまとめられてきた。だが、科学的な観点からフーコーを読むことを通して、日本の批評をEMやANTに関する専門的な議論の場に持ち込むといった作業は、文学研究の共通課題として捉えられてこなかったと思われる。これは研究史上の欠落として認識されてしかるべきではないだろうか。

そうした状況をふまえて本稿では、筆者のこれまでの「革命的

批評」に関する研究を元手としながら、「批評の考古学」について方法的な考察を行なった。とりわけ、科学史や社会学の成果と批評史研究を接続することに重点を置いた。

人文社会科学の考古学的な探究において、批評の考古学は特異な位置を占める。批評は大学制度内の学問分野ではないが、学術的な文章の一種ともみなされることもある。マルクス主義的な知識を取り込み、それを文学についての語りと結びつけることもある。ときに「事実」や「論証」に拘ったり、逆に論理を飛躍させたりする。「批評」という観念をめぐる議論したり、批評家のなかで批評らしさを競ったりもする。これらの実践は、確実に近代日本の知的営為の一角を担っていた。

輪郭の不確かで定義の曖昧なこのジャンルを論じるためには、文学研究のみの力では足りないだろう。そして、関連領域と対話するためには、文学研究もまた自らを変容させることが必要となる。本稿はそのような自己変容の試みとして書かれた。今後、様々な学問分野の知見を取り入れながら、学際的な議論の場を作っていくことで、近代日本の批評の研究の未来は切りひらかれてゆくはずである。

注

(1) 筆者による批評史研究の理論的考察としては、主に以下を参照。木村政樹『革命的知識人の群像——近代日本の文芸批評と社会主義』（青土社、二〇二二年）序章、同『批評とはなにか——「革命的批評」から再考する』（『湘南文学』第五八

号、二〇二三年三月）、同「エビステモロジ的「批評」研究の〈対象／方法〉論」（『湘南文学』第五九号、二〇二四年三月）。本稿はこれらの考察の統篇的な性格を持っている。

(2)

佐藤俊樹が「本来、言説分析は反社会学なのである」（「近代を語る視線と文体——比較のなかの日本の近代化」高坂健次・厚東洋輔編『講座社会学Ⅰ 理論と方法』東京大学出版会、一九九八年、八九頁）と述べたのをはじめ、日本では「言説分析」が通常の社会学とは別の営みであることを強調する考察が蓄積されている。佐藤俊樹・友枝敏雄編『言説分析の可能性——社会学的方法の迷宮から』（東信堂、二〇〇六年）所収の、佐藤俊樹「閥のありか——言説分析と「実証性」および遠藤知巳「言説分析とその困難（改訂版）」——全体性／全域性の現在の位相をめぐって」を参照。また、スチュアート・ホールやエルネスト・ラク라우＋シャントラル・ムフラによるフーコー受容を批判したものとして、ギャビン・ケンダール＋ゲイリー・ウィツカム「フーコーを使う」（山家歩・長坂和彦訳、論創社、二〇〇九年）を参照。
ミシェル・フーコー「知の考古学」（慎改康之訳、河出文庫、二〇一二年）を元にとめた。使用した術語は同書の訳語によっている（「事項索引」も参照）。

(4) この論点については、『文学＋』04号（二〇二四年九月）の「シリーズ・近代現代文学研究座談会 昭和（戦前）編 理論・文学・運動」における加藤夢三氏との対話でもふれた。

(5) 前掲「エビステモロジ的「批評」研究の〈対象／方法〉論」。

(6)

『文芸時評大系』の「凡例」には、「『文芸時評』とは何か、未だ明解な定義はないが、大掴みにいって、雑誌に掲載された創作への作品月評ととらえ」た旨が書かれている（『文芸時評大系 明治篇』第一巻、ゆまに書房、二〇〇五年、頁数記載なし）。文芸時評については様々な議論があるが、概観するにあたっては曾根博義「解説——戦後における文芸時評の再生と大衆化」（『文芸時評大系 昭和篇Ⅱ』別巻（索引）、ゆまに書房、二〇〇九年）、同「解説——文学の黄金時代における文芸時評」（『文芸時評大系 昭和篇Ⅲ』別巻（索引）、ゆまに書房、二〇一〇年）、大澤聡『批評メディア論——戦前期日本の論壇と文壇』岩波書店、二〇一五年）第2章、松本和也『文学と戦争——言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』（ひつじ書房、二〇二二年）第Ⅰ部第1章を参照。この点については、フーコー前掲書、Ⅱ—Ⅱを参照。

(7)

松村一志「エビデンスの社会学——証言の消滅と真理の現在」（青土社、二〇二二年、一四二—一四四頁。傍点原文）。

(9)

同右、一四五頁。

(10)

同右、三三八頁。

(11) 松村前掲書がここで参照しているのは、久保明教『ブルーノ・ラトゥールの取説——アクターネットワーク論から存在様態探求へ』月曜社、二〇一九年。なお、ケンダール＋ウィツカム前掲書は、「ラトゥールの方法はフーコーのそれ

と大きく一致する」(一〇頁)という見通しの元にフーコーの方法を読み解いている。

- (12) 金信行「解説論文 経験的研究においてブリュノ・ラトゥールの理論はいかなる意義を持つのか——ラトゥールが行なった経験的研究の比較検討に基づくアクターネットワーク理論の学説史／理論研究」(ブリュノ・ラトゥール＋ステイヴ・ウールガー『ラボラトリー・ライフ——科学的事実の構築』ナカニシヤ出版、二〇二一年、三〇一頁。

(13) 同右、同頁。

- (14) イアン・ハッキング『知の歴史学』出口康夫・大西琢朗・渡辺一弘訳、岩波書店、二〇一二年。同『何が社会的に構成されるのか』(出口康夫・久米暁訳、岩波書店、二〇〇六年)も参照。

- (15) 石井幸夫「種の曖昧な縁——ハッキングの歴史的存在論について」中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』勁草書房、二〇一三年、一九七頁。

(16) 前掲『知の歴史学』、二一三頁。

- (17) ハッキングのいう「人間種」「相互作用種」については、前掲石井論考が考察している。なお、フーコーの『知の考古学』は科学史や社会学に留まらないインパクトを有しており、近年も考察が続けられている。たとえば、福尾匠『非美学——ジル・ドゥルーズの言葉と物』(河出書房新社、二〇二四年)は「言葉」と「物」の問題をフーコー・ドゥルーズの関係で論じている。福尾によれば、『知の考古学』のフー

コーは、「言説の「統一性」を分析の前提とするのではなく、むしろ言表の分散を前提とし、「諸々の統一性をシステムティックに消去」したうえで、特定のかたちで統一性が生産されるプロセス」(二七九—一八〇頁)に注目した。これは簡潔な整理だと思われるが、もし議論のアクセントの置き方を変えるならば、フーコーにおいて「統一性」は「分析の前提」ではないが、議論の前提にはなっている、と語り直すことも可能だと思われる。すなわち、これまでの人間諸科学で前提とされてきたような「統一性の数々をシステムティックに消去することによって」(フーコー前掲書、五七頁)こそ、考古学は科学史においてインパクトを持ちうるのだ、と。この点を強調するのは、日本近代文学研究における「言説」研究の多くが実質的にメディア上の「表象」分析だったのに対して、人文社会科学や批評を科学的に取り扱うべきだという本研究の提案の意味合いをはっきりさせたいためでもある。「言葉」と「物」について思考を深めるためには(言語論的転回や社会構築主義以降人口に膾炙した)「それは言語によって構築されたものにすぎない」といったタイプの議論とは異なる仕方である必要がある、この点からみても科学論には参考になる知見が蓄積されている。たとえば久保前掲書における「ノンモダニズム」についての議論を参照。なお、松村前掲書ではフーコーが「反・反実在論」の立場に位置づけられている。

- (18) 「ナビゲーション(1)」酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村

和生編『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版、二〇〇九年、四頁（引用箇所は前田泰樹による執筆）。

- (19) EMとは、「実践において用いられている」「人びとの方法論」の名前であり、それを用いて実践を記述する研究の名前でもある」（はじめに）前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編『ワードマップ エスノメソドロジー——人びとの実践から学ぶ』新曜社、二〇〇七年、vi頁（引用箇所は前田泰樹による執筆）。

- (20) ラトゥール・ウールガー前掲書は二〇二一年九月発行、ロレイン・ダストン・ピーター・ギャリソン『客観性』（瀬戸口明久・岡澤康浩・坂本邦暢・有賀暢迪訳、名古屋大学出版会）は二〇二一年八月発行。

- (21) 岡澤康浩「可能性の空間の地図制作——概念の歴史学と実践の社会学の対話」『人文学報』第二二二号、二〇二四年六月、三頁。

- (22) 河村賢「普段着姿の認識論と存在論に立ち戻る」『人文学報』第二二二号、二〇二四年六月、四二頁。

- (23) 同右、三八頁。

- (24) 松沢裕作『歴史学はこう考える』ちくま新書、二〇二四年、二七三頁。EMとの関係については、「おわりに」で記されている。

- (25) 松村前掲書、二六二頁。

- (26) 中山弘明『学問史』としての近代文学研究——「はじめ」

の位相」ひつじ書房、二〇二四年。

- (27) たとえば、芳賀登『批判近代日本史学思想史』（柏書房、一九七四年）を参照。

- (28) 「歴史家的自己」と呼んだが、問題は狭義の歴史学に限定されるものではないことに注意されたい。なお、フーコーの「自己のテクノロジー」論をふまえた研究として、ダストン・ギャリソン前掲書における「科学的自己」についての考察を参照。

- (29) 前掲「批評とはなにか」を参照。

- (30) 福田和也「柄谷行人氏と日本の批評」『福田和也コレクション1 本を読む、乱世を生きる』ベストセラーズ、二〇二一年。

- (31) 福田は次のように述べている。「……氏『柄谷』の「批評」は、あくまで小林秀雄によつて創始された近代日本特有の、きわめて特殊な文芸ジャンルの謂である。それはまた「知ること」に対して「信すること」を突きつけるような、歴史や世界を超越して理論をこじつけたり、意味を見いだしたりしない、内側で生きられるほかない営みとしての批評である」（福田前掲論考、二一七頁）。

- (32) この点について考えるうえで、テキスト内での先行研究についての言及や注の付け方など、一般に学術論文のスタイルに関わると思われる諸要素のありようも大きな意味を持つと思われる。

- (33) 金前掲論考、三〇一頁。

(34) 前掲「批評とはなにか」、四一頁。

(35) 前掲「批評とはなにか」で筆者は、「革命的批評とはなにか」という問いに絞り込んだうえで考察を進めた。それに対して本稿では、「批評の考古学」というプログラムのなかで「批評とはなにか」という問いを再設定することを試みた。

(36) 松村前掲書、一三九—一四〇頁。なお、松村のこの記述は、言説分析の「方法」「反方法」をめぐる論争を背景として展開されている。この論点についてはさしあたり、前掲『言説分析の可能性』および赤川学『構築主義を再構築する』（勁草書房、二〇〇六年）を参照。

(37) 拙稿「将棋と文学研究」について——文学史とは別の仕方——（『将棋と文学スタディーズ2』将棋と文学研究会、二〇二三年）などを参照。

(38) 岡澤康浩「接続と切断の科学史にむけて」『人文』第六九号、二〇二二年六月、三四頁。

(39) 同右、三六頁。

※本研究は、JSPS科研費JP23K20080の助成を受けたものである。

(きむら・まゆみ 本学専任講師)